

## まえがき

本書は社会科学や心理学を基礎にしてコミュニケーション問題について分析・叙述した本である。大学で講義を行うためのテキストとして書かれているので、「社会と言語表現」というタイトルにした。「言語表現」と銘打っているだけで、言葉の使い方や文法について解説してある本のような感じがするだろうが、実際には「社会」の方に重きを置いている。社会の現状分析を基に、法学、経済学、社会学、心理学、脳科学などの知見を横断的に検討して解説したものだ。また、法学の分析の中には日本国憲法にも関連する問いが含まれている。そういう意味では、現代社会や将来的な国家像を模索する上でも重要な示唆を提供したつもりである。副題の「コミュニケーションってなに？」にも意味があり、今日ではコミュニケーションが単に言葉を発することくらいの軽い意味で使われているが、集団生活を強みとしてきた人類（ホモ・サピエンス）にとり、コミュニケーションの持つ意味はとてつもなく大きいことを説いた。しかも、人類は言葉をメタ認知（自分の言動を客観的に見る認知行為）を含めて重層的に駆使し、あるいは言葉に付随して表現される非言語表現によって重要な意味を伝えてきたことを知ると、単に「言葉で説明する」あるいは「キチンと説明する」くらいの定義では、何も説明していないのと同じだということが分かってくる。答えを先に言ってしまうと、コミュニケーション能力は学校の授業だけでは身に付かない。むしろ、学校生活全般の活動を通じて経験的に身に付けるものだ。社会人であれば、仕事の段取りやちょっとした雑談が、実は意義深いものだということが分かってくる。ところが、これは合理性や効率化が重視される現代社会においては排除される（削ぎ落とされる）べきものだと信じられてきた。

人はなんと不合理な道を歩んでいるのだろうか。歴史学によれば、封建時代は個人に生き方の自由がなく、各人の頭の中はさまざまな迷信によって支配されていた不自由な世界ということになっている。これに対して近代は、

産業化を基礎とする資本主義経済が発達し、技術革新による自然の解明が次々になされた明るい時代だと説明される。確かに、個人の自由が拡大し、資本の蓄積が行われると、現代のような市民社会が実現した。その結果、現代人はどこに暮らそうと（居住の自由）、どのような仕事を選ぼうと（職業選択の自由）、何を考えよう（思想・信条の自由）、自由になった。また、誰を好きになろうと、誰とカップルになろうと（婚姻の自由・個人の尊重）、どれだけお金持ちになろうと（私有財産制の保障）、一定の手続きや義務を果たせば、あとは自由である。つまり、社会制度上は、人は封建時代よりも圧倒的に自由で幸福になっているはずである。ところが、実際には、格差に悲観し（雇う側と雇われる側の格差だけでなく、正規・非正規といった雇われ方の差）、豊かさを感じられず（貧困化が大きなテーマに）、友達ができずに孤独となり（孤独死が問題化）、カップルにもなれず（生涯未婚が社会問題に）、他人とのコミュニケーションに苦慮する（コミュ障などと呼ばれる）などの問題が頻出している。

現代社会を特徴づける技術はデジタル技術であるが、これが進化してネット技術や AI 技術を生み出した。この両者が融合して、人間関係や労働環境まで変わりつつある。本書では実験的に、AI を使った学生の人生相談事例を載せてみた。もう既に、学校や企業では多かれ少なかれ、AI が一定程度は導入されている。これが事務作業の効率化で使われているなら、それほど驚くことではないが、学生の人生相談という、まさに人間関係の典型例のような事項で AI がどのくらい有用なのかを試してみたわけである。その結果は、本書を読んでもらえれば分かるが、驚くほど有用で、一般の教職員よりも有能なスタッフになりそうなくらいの成果を発揮しそうである。人の相談に乗ったり、雑談でさえも苦手とする大人が出現する一方で、AI が人生相談において有効な答えを次々と繰り出すことができる。テクノロジーの進化が人の人生相談を受け持つ。これを文学的かつ芸術的表現で表現するならば、まさにシュールな世界が出現しようとしていると断言できる。

他方で、人はなんと不合理な精神を身につけているのだろうか。科学技術

が進歩し、生活は便利になっているはずなのに、人の精神は必ずしもこれと歩調を合わせられない。現在はデジタル技術やネット技術が飛躍的に進展し、いつでもどこでも情報が得られる便利な世の中になっているはずなのに、このことが人と人の関係を疎遠にし、他人との共感を得られにくくしている。集団化を得意とし、集団化によって生き抜いてきた人類（ホモ・サピエンス）にとっては苦難の時代に入った。

以上の社会状況を知った上で、第4章に書いたように、これからの時代には人生を再定義しなければいけないと考える。少なくとも、現代社会で何が起きているのかを理解する必要がある。詳細は本文に譲るとして、これからの時代の特徴を知り、逞しく生き抜くための示唆を与えてくれる書籍を紹介した。順に、外山滋比古『思考の整理学』、スペンサー・ジョンソン『チーズはどこへ消えた?』、シェリー・タークル『つながっているのに孤独』、シャルル・ペパン『フランスの高校生が学んでいる哲学の教科書』、ロバート・ウォールディング『グッド・ライフ』である。紹介も兼ねて、これらの書物から一定の示唆を抜き出したので、これからの生き方の参考にして欲しい。

著 者



社会と言語表現  
コミュニケーションってなに？

---

目 次

序 コミュニケーション能力とは？ .....	1
第1章 コミュニケーションを苦手とする者が増えた理由 .....	4
1. つながっているのに孤独である    4	
(1) 孤独感の蔓延           4	
(2) 親友や相談相手の数が減少    5	
(3) コミュニケーション能力への不安   6	
(4) なぜコミュニケーション能力に不安を感じるようになったのか？    6	
(5) コミュニケーション能力と他の資質・能力との相関    8	
(6) 社会構造の変化           11	
2. コミュニケーションを苦手とする者が増えた理由    13	
(1) 人は自由を求めて孤独になり、その孤独が不安を呼ぶ    13	
(2) 孤独が他人への攻撃に火をつける    15	
3. 人への信頼は幼少期にできる、幼少期の親子関係と対人関係の関連性    16	
(1) 親との関係がその後の対人関係を規定する    16	
(2) 家庭内別居などの機能不全家庭で育った場合の悪影響    18	
4. 共感と悩みの相関関係    24	
(1) なぜ他者との共感は心地良いのか？    24	
(2) 共感が生むマイナス面    26	
(3) 共感と悩みの相関関係    28	
(4) メタ認知と「何もしないこと」の効用    30	
5. 人間関係の希薄化    31	
(1) 日本における若者の自殺    31	
(2) 承認欲求は諸刃の剣である    38	
(3) ネット社会では承認欲求が短所となりやすい    40	
6. 不安や虚しさと向き合う時の対処法    42	
【想定事例1】大学1年生の女性    43	
【想定事例2】大学を1年生の夏に退学した男性    45	

【想定事例3】大学2年生の男性	48
【想定事例4】大学3年生の女性	51
【想定事例5】大学4年生の男性	54

第1章 参考文献	57
----------	----

## 第2章 法的な枠組みと社会の現状 ..... 60

1. 自分は本当に世の中を正しく見ることができているのか？	60
(1) 事例としての年金問題	60
(2) 世界人口の動向	63
(3) 日本の「少子化」の裏に隠れる重大な問題	65
2. 日本の治安は悪くなっているのか？良くなっているのか？	67
(1) 犯罪行為とは？	67
(2) 犯罪の取り締まりや捜査を行う機関	67
(3) 刑法犯とは？	68
(4) 近年の犯罪行為の推移	68
(5) 日本社会の体感治安「犯罪は増えて危険が増している」という誤解	71
3. 刑事法から世の中の中の仕組みを考える	72
(1) 刑罰を科す根拠について	72
(2) 裁判員制度	74
(3) 日本の課題	75
4. 基本的人権と死刑制度について	76
(1) 欧米の死生観としての人権思想	76
(2) 日本国憲法における基本的人権の規定	78
(3) 刑罰としての死刑	79
(4) 死刑に関する関連条文	80
(5) 死刑制度に関する賛否の論点	81
(6) 死刑存廃国の数	82
(7) 日本における世論調査と死刑制度の維持	82
(8) 内閣府による世論調査の結果	83
(9) 国連人権理事会による日本政府への勧告	83

(10) 基本的人権について再考する	84
5. まとめ	86
第2章 参考文献	88
<b>第3章 情報社会と家族像の変化</b> .....	<b>90</b>
1. ネット社会における情報	90
(1) 情報社会において何が起きているのか	90
(2) 報道におけるマスメディアの役割	90
(3) マスメディアの奢り	91
(4) ネット社会と情報過多	93
2. 社会変化と日本の家族	95
(1) 家族法に盛り込まれた思想	95
(2) 婚姻・離婚と親子関係	96
(3) 同性婚・LGBTQ に対する裁判所の判断と自治体によるパートナーシップ制度	100
(4) 婚姻をめぐる世界的な状況には大きな変化がある	102
A. 米国	
B. フランス	
C. 東アジア (日本・韓国・中国)	
(5) 婚姻と離婚：日本の現状はどうなっているのか？	107
(6) 現実には日本社会はどう変化しているのか？	107
3. まとめ	113
第3章 参考文献	116
<b>第4章 コミュニケーション能力を再考</b> .....	<b>118</b>
1. コミュニケーション能力とは？	118
(1) バーバルとノン・バーバルなコミュニケーション	118
(2) メタコミュニケーション	121
2. いわゆる「コミュ障」について	126
(1) 心理的な原因と技術的な原因	126

A.	技術的な原因があるコミュ障の場合	
B.	心理的な原因があるコミュ障の場合	
(2)	親子関係から見える「私」	128
(3)	人はなぜトラウマを抱え鬱になるのか	129
A.	過去のトラウマを克服して、強く生きる方法	
B.	うつ病からの復帰、頑張らなくていい	
C.	「暇」が人生を狂わせる	
3.	デジタル時代の生き方	133
(1)	日本社会における「不安感」の正体	133
A.	日本では統計的には不安障害は少ない	
B.	国連 SDSN の調査による日本の世界幸福度ランキング	
C.	OECD の調査による日本の幸福感指数	
(2)	資本主義社会の宿痾（しゅくあ）である「不安感」	139
(3)	なぜ子供の貧困が問題となるのか？	143
(4)	人間関係を AI で代替できるか？	146
(5)	人生を再定義する	149
★	外山滋比古『思考の整理学』からの示唆	
★	スペンサー・ジョンソン『チーズはどこへ消えた？』からの示唆	
★	シェリー・タークル『つながっているのに孤独』からの示唆	
★	シャルル・ペパン『フランスの高校生が学んでいる哲学の教科書』からの示唆	
★	ロバート・ウォールディングー『グッド・ライフ』からの示唆	
(6)	まとめ	162
第4章	参考文献	164
あとがき		167



# 序

## コミュニケーション能力とは？

本書を書く気になったのには訳がある。長い間、著者は大学に勤務しているが、年々、学生のコミュニケーション能力が落ちてきていることが気になっていた。特に、コロナ禍を境にそうした傾向が顕著になった。一体なにが起きているのだろうか？これまでずっと学部生や大学院生の学生指導をしてきたが、一対一で話してみると、それほど問題はないように見える。また、学生に発表などをしてもらおうと、それなりに内容をまとめることも上手だし、発表時に緊張しているようにも見えない。つまり「喋る力」それ自体は落ちていないのだ。では、なぜ？

少し話が逸れるが、場面を学生の就活に変えよう。近年の大学新卒の就職活動に興味深い現象が起きている。企業が新卒の若者を採用する際に注目する性質や能力を、順を追って掲げると、

- (1) コミュニケーション能力
- (2) 主体性・行動力
- (3) 協調性・チームワーク
- (4) チャレンジ精神

となり、それ以降に、(5) 論理的思考力、(6) 学習意欲や能力のポテンシャル、(7) 誠実さや真面目さ、(8) 企業文化への適応力…と続く。企業から見ると、(1)～(4) は社会人となる基礎的項目であり、(5) 以下が入社後の育成により社会人として成長するための潜在力や、その前提となる人間性に着目した項目となっている。

なんと、今や企業が学生に求める性質や能力の第一位が「コミュニケーション能力」なのである。日々、ネットに接し、スマホを握りしめて生活している大学生にとって言葉は溢れている。大学でのちょっとした課題などは

ネットでちょろちょろと検索すれば、すぐに解答が得られる。大学においてグループ学習も盛んで、発表にも慣れている。言葉は世の中に溢れている。その新卒大学生に求められる性質や能力の筆頭に掲げられるのがコミュニケーション能力なのである。これほどの皮肉があるだろうか。そもそもが、コミュニケーションの仕方や主体性、協調性、チャレンジ精神が、大学に入って学ばなければいけないテーマなのであるだろうか？また、一步引いて考えてみた場合、企業が求めている「コミュニケーション能力」とは、本当のところ何を指しているのだろうか？内容はともかく、それが足りないということは、逆側から見れば、現代社会が何らかの要因で、大人になるまでに（大人になっても）それらを身につけさせないようにしている阻害要因があると推察することもできる。いったいその阻害要因とは何なのであるだろうか？

これまで何人も学生指導をしてみて感じるのは、どちらかと言うと喋る能力よりも聞く能力の方が落ちているのではないかという印象だ。「聞く」と言っても、単語の聞き取りのことではない。「他人の話を聞く」という意味だ。おそらく、何らかの要因で、学生は自分で何かを喋ることばかりに一生懸命になり、他人の話を（その背後まで含めて）聞くという作業に疎くなっているのではないだろうか。また、現代の学生は目的を決めない雑談にも苦手意識がある。雑談はコミュニケーションを成立させる前段階の重要なステップなのである。現代社会では情報が過多になり、常に相手の話を聞き流すことが普通になってしまっている。おそらく、企業が新入社員に求めているのは、キチンと相手の話を聞いて、それを実行することなのであるだろうか。相手の話を丁寧に聞き、タイムリーに自分の意見も挟み、全体を引っ張っていく社員を求めている。それならば、新卒社員に求める性質や能力に、コミュニケーション能力 → 主体性・行動力 → 協調性・チームワーク → チャレンジ精神…と順に掲げる理由にも合点がいく。

今や情報は世の中に溢れている。言葉も世の中に溢れている。しかし、この高度情報化社会には、何か決定的に人のコミュニケーション能力を奪う原因が潜んでいるはずだ。人が何に苦慮しているのか？これを少しでも紐解く

ために、本書を書こうと決心した。

内容は、まず第1章で人間関係を中心に取り上げる。コミュニケーションを成り立たせるためには、その背後にある人間関係（対人関係）が決定的に大切である。したがって、今日の人間関係に何が起きているのかを中心に分析する。第2章は、現代社会の基礎にある治安と人権について取り上げる。今日の社会がどういう構造や思想で成り立っているのかを知ることは大切である。第3章は今日の情報社会が家族に与える影響についてである。デジタル技術とネット技術の進歩により、仕事はかなり合理的に進められるようになったが、この副作用として家庭生活にも（無意識に）この合理性が持ち込まれている。このまま放っておけば、家族も単なる「個」の集まりに過ぎなくなる。最後の第4章で前半が人のコミュニケーションを成り立たせている要素を細かく分析する。ノン・バーバル（非言語）な手法やメタコミュニケーションを上手に操りながら、高度なコミュニケーションを成り立たせているのが人類だ。これまではこうしたコミュニケーションの技法を人生経験によって自然に身につけていた。今日ではそれが困難になっている。後半は、これからの時代（デジタル時代・ネット社会）を生き抜くには、人生を再定義しなければいけないことを説明する。おそらく、これからデジタル技術に関連してもっと高度な技術が次々と編み出されてくるはずだ。それらにただ依存するのは危ない。技術は使うためにある。自ら人生を再定義しないと、技術に使われる人間になってしまう。

## 第 1 章

# コミュニケーションを苦手とする者が増えた理由

## 1. つながっているのに孤独である

### (1) 孤独感の蔓延

現代社会ではインターネットの発展により、常に誰かと接続されている状態にある。インターネット技術が民間に開放された黎明期には、「インターネットで世界中の人と繋がるができる」と理想の世界が実現されたかのように喧伝された。確かに、今日ではフェイスブックやインスタグラムなどを使って、世界の著名人と直接繋がったり、事件当事者のナマのデータを直接見することもできる。グーグルや ChatGPT を利用すれば、昨日まで知らなかった今ホットな話題について詳しく知ることもできる。TV がなくても Youtube があれば、最新のニュースの要点を短時間で知ることもできる。米国の友達、オーストラリアの友達、フランスの友達も自分から挨拶して情報交換すれば、その当日からいろいろ意見のやり取りもできる。著者もかつて、ほぼ24時間（と言うのは言い過ぎだが、就寝している時間以外は常時）世界中の友達と繋がり、Good Morning から始まり、こちらが夜になると、See You! でとりあえずの休息を取る、という生活をしていたことがある。時差の都合で、こちらが夜で相手が朝というシチュエーションは当たり前なのだ。ネットで見知らぬ人と繋がると、それなりに楽しいことがある。こちらの文化と相手の文化が異なっていることを痛感することもあり、そういう意味では勉強にもなる。

しかし、他方で、皮肉なことに、ネット社会が進展すればするほど、世界的には孤独や孤立が進んでいる。ネットで人と人が繋がり、情報収集をネッ

トに頼れば頼るほど、その副産物として物理的・心理的な人間関係が希薄化する。その結果、現代人は親友と呼べる人がいないし、困ったときに相談できる相手がいないという悩みを抱えることになる。このことが個人の精神衛生上マイナスに働き、不安を抱える者が増え、社会全体の許容力やレジリエンス（弾力性や危機への回復力）を低下させている。

内閣府が実施した「孤独・孤立の実態把握に関する全国調査（令和6年実施）」によれば、「孤独であると感じるか？」という直接質問と「人のつきあいが無い・取り残されていると感じるか？」という間接質問のいずれでも、4割前後の者が「孤独である」と回答している。しかも、年齢別で見ると、若年層（特に20～29歳）や中年層（特に30～39歳）の数値が高い傾向にある。

・直接質問の孤独感がある（「しばしばある・常にある」「時々ある」「たまにある」の合計）は全体で39.3%になる。これが20～29歳では43.2%、30～39歳では42.9%になる。

・間接質問の孤独（人とのつきあいが無い・自分は取り残されている・孤立している）な状態である（「常にある」「時々ある」の合計）は全体で45.8%になる。これが20～29歳では50.0%、30～39歳では54.7%にもなる。

つまり、実に国民の5人に2人が孤独を感じており、その傾向は高齢者よりもむしろ20代・30代の比較的若い層で高いという衝撃的なデータとなる。

## （2）親友や相談相手の数が減少

こども家庭庁による「情報化社会と青少年に関する調査」（2011年）で「青少年に対する質問」として友達は何人いるか？、親友はいるか？を調べた統計がある。これによれば、12歳～22歳で男女共に最も多い答えが6～10人となる。しかし、気になる数値もあり、「友だちが0（ゼロ）」と答える

者もいる。男子では、12歳～14歳で0.4%（女子は1.7%）、15歳～17歳で1.1%（女子は0.3%）、18歳～22歳で0.5%（女子は0.5%）だ。

近年では、世界的にも大人になるにしたがって友だちの数が減る現象が指摘されており、英国や米国では、親しい友だちがいない者が増えていることが社会問題の一つとして報告されている。それによると男女共に25歳をピークとして友人や知人の数が急速に減る現象が指摘されている。具体的には、米国人の成人男性の15%・成人女性の10%が「友だちがいない」と答える。日本でも、「何でも相談できる友人がいない」と答える20代～30代の男女は約15%程度と報告されており、世界的に友人の数の減少が起きていることが分かる。

### (3) コミュニケーション能力への不安

コミュニケーションの能力の高低は、次の4つの要素から説明できる。すなわち、聴く力・伝える力・質問する力・協調性だ。これはさらに自分の意見を非言語・言語で伝える力や相手の言葉・非言語を理解する力にも分解できる。これらの要素が絡み合っって人と人のコミュニケーションが成り立っている。このうち、日本人が不得意と考えているのが、前の類型で言えば、伝える力と質問する力であり、後の類型で言えば自分の意見を非言語・言語で伝える力である。実際に、株式会社JTBが2018年に行った「コミュニケーション総合調査」において、「コミュニケーション全般」を苦手と感じている人は58%、「複数の人の前で、発表すること」が苦手な人は75%、「初めて会う人と話すこと」が苦手な人は63%、という調査結果が出ている。

### (4) なぜコミュニケーション能力に不安を感じるようになったのか？

コミュニケーションの悩みは、世代によってその質と要因が大きく異なる。特に若年層の場合には自分に自信がないことが多いが、早くから電子機器を使うことを覚えるので、他人の評価に晒されることも多い。インスタグラムやフェイスブックの投稿で「いいね」がつくかどうか死活問題とな

る。また、これらに熱中することにより、本来は家族や友だちと話すための時間が激減することになる。思春期を過ぎて成年の年齢に達すると、一人暮らしを経験したり、家庭を持つ年代となる。かつてなら、たとえ独身でもご近所との付き合いがあり、面倒くささはあったが、近所にどのような人たちが住んでいるかは肌感覚で分かった。しかし、今日ではマンションを中心に、隣にどのような人が住んでいるのかもよく分からない（顔は見たことがあるが、職業や年齢は分からない）のが普通になった。また、未婚や晩婚が増え、一定の年齢以上の人でも結婚して配偶者や子供がいるのが当たり前とは言えなくなっているため、話題に困るし、互いに常識も違ってくる。これを表の形にすると表-1 のようになる。

デジタル化やコロナ禍の弊害で、本来は自然と幼少期からの経験により身についたはずのコミュニケーション能力が極端に低い（場合によっては、抜

表-1

要 因	具 体 的 な 影 響
① デジタル化の弊害	SNSの「いいね」数などで人間関係が可視化・数値化され、他者との比較による劣等感が増大。リアルな対話の練習機会が激減する。
② 都市化による地域社会の消滅	近所付き合いの煩わしさから解放された反面、挨拶する相手もいない環境が標準化し、相互扶助機能が低下する。地域の自治組織である町内会も、ただ煩わしい集会和みなされるようになる。
③ 晩婚化・未婚化が進み、少子化も進む	既に核家族ですらなく、家族という最小単位のコミュニティを持たない者が増加。10年度には、単身世帯が3～4割になると予測される。
④ コロナ禍の後遺症	2020～22年の3年間にわたるソーシャル・ディスタンスが標準化し、他人に接触しないことが常態化した。特に子供～若年層に弊害が大きい。関係構築スキルが発達しないまま大人に。
⑤ 自己責任論の浸透	「孤独になるのは努力不足」、「コミュ力が高いのは自己責任」という自己責任論が顕著になる。他人に助けを乞うのは「弱さ」と見なされる。

出典：著者作成

け落ちた) 大人が出現している。この状態で社会人になると、接客ができない、電話が取れない、上司に怒られるとメンタルがやられる、という類の大人になる。また、大人になっても、晩婚化や未婚化の影響でパートナーもいないので、徐々に孤独になる者が増加している。人と人の付き合いは、互いに迷惑をかけながら付き合うのが普通だが、子供を育てた経験もない者も増えるので、他人からの迷惑に対する耐性も弱くなる。かつてのように自宅に居るだけでは何もなくつまらない日常ではなく、ネットでは外の世界と繋がっているのも、匿名での投稿が心地よく、他人の「いいね」を異常に気にし、わざと「炎上」させるような投稿を繰り返すというネット依存症も増えつつある。社会的な風潮として、何かの失敗はその人の努力や力量の不足、つまり、自己責任を問う自己責任論が根強いので、失敗を極端に恐れるようになる。こうして、知らず知らずのうちに、社会全体にコミュニケーションに対する不安感が醸成される土壌ができあがる。

#### (5) コミュニケーション能力と他の資質・能力との相関

国立青少年教育振興機構が、平成 29 年 (2017 年) に公表した調査結果がある。「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究」と題したレポートで、日本の青少年の自己肯定感が諸外国に比べ低いと指摘されていることから、日本の子供が成長する過程で経てきた子供の頃の体験を基本にして、自己肯定感、へこたれない力、意欲、コミュニケーション力の強弱とその相関関係を調べている。この調査研究では、子供の頃の体験を経て得られたこれらの資質・能力こそが社会を生き抜くために必要な力になっていると位置付ける。

それによると、家庭内での体験では、就学前の基本的な生活習慣や家族行事および小学校低学年以降のお手伝い、家族行事の有無が、意欲、コミュニケーション力、自己肯定感と相関関係にある。また、地域での体験のうち、小学校低学年時に公園や広場で友だちと外遊びをしたこととコミュニケーション力に相関があり、また、これが社会を生き抜く資質・能力の相関関係

にも繋がる。学校での体験のうちでは、体育祭や文化祭の実行委員がすべての資質・能力と相関がみられ、部活動の部長や役員、学校の運動系部活動で活動したことが、ほぼすべての資質・能力と相関があることが分かった。

この分析はさらに詳細な相関関係を解き明かす。箇条書きにすると、

- ・お手伝いや家族行事といった体験が多く、家族との愛情や絆を強く感じていた人や外遊びを多くし、遊びに熱中していた人ほど、社会を生き抜く資質・能力が高い。
- ・親や先生、近所の人から褒められた経験が多かった人は、社会を生き抜く資質・能力が高い。(興味深いことに)褒められながらも、同時に厳しく叱られた経験も多かった人は、より社会を生き抜く資質・能力が高くなる。(褒めるばかりではいけないことが分かる。)
- ・家族との愛情・絆を強く感じていた人ほど、結婚願望や子育て願望が強く、遊びの熱中度が高かった人ほど、自己啓発やボランティア活動を行っている人が多い。
- ・子供の頃、家庭の教育的・経済的条件に恵まれなかった人でも、親や近所の人に褒められた経験が多かった人、家族でスポーツしたり自然の中で遊んだことや友だちと外遊びをしたことが多かった人は自己肯定感が高い。
- ・へこたれない力が高い人ほど、恋人に理由もなく突然ふられた時は落ち込んだが、これも人生の肥やしと思った、スポーツ競技で補欠に回ってしまった時は監督を見返してやろうと思い、再び練習に打ち込んだなど、物事を前向きにとらえ、あきらめずがんばろうとする意識が高い。

このうち、4つの資質および能力=自己肯定感、へこたれない力、意欲、コミュニケーション力の相関関係を見ると、コミュニケーション力が、特に意欲と自己肯定感と強く結び付いていることが分かる。